校 長 室 だ よ り（No.14）

令和４年８月29日
丹波市立黒井小学校長
谷口　千尋

夏休みの自由研究から

８月26日から２学期が始まりました。夏休みの作品展の準備も着々と進んでいます。今年の黒井小学校の自由研究には、「日本で発掘された恐竜を調べよう」「AEDについて知ろう！」や「イルカの大研究」、「夏にピッタリのアイスクリーム作り」など、個性豊かで楽しいものがありました。感心したのは、自由研究のために実際に本物を体験したことが多いということです。イルカの研究では、「イルカと一緒に泳ぎたいという長年の夢」をとおしてイルカという生き物を深く知るきっかけとしていました。実際に一緒に泳いで夢を叶えたこともとても素敵だと思います。疑問に思ったことをイルカの飼育員の方に教えてもらっていることや、今後、何が大切かについて、背伸びをしないで考えているところにも感心しました。この研究後の新しい課題につながればよいと思いました。

以前にも書きましたが、自由研究は、大正時代の新しい教育運動の中で誕生した学校などで始められた子どもたちの「興味・関心と体験」に重きをおいた学習活動の時間が始まりと言われています。ちょうど現在の「総合的な学習の時間」が誕生した経緯と大変よく似ています。子どもたちの「主体性」が大切にされる今、「探求」ということを大切にしていきたいところです。

子どもたちが何について知りたいか、何に興味を持つかという「自主性」と大人の側からみて取り組んでほしい「課題性」との兼ね合いが難しいとよく言われます。しかし、課題を持つ。→調べる方法を考える。→調査する。→情報を集める。→まとめる。→発表する。の手順は同じだと思います。この問題解決的な「学び方」を覚えるのも「自由研究の学び」のひとつだと考えます。

この問題解決型学習は、現在いろいろなところですすめられている「アクティブラーニング」の教育方法として注目を集めています。アクティブラーニングの目指すところは「正解・解答のある課題に取り組み知識・技能を得ること」ではなく、「正解のない課題を通して問題解決へのアプローチ方法を身につけること」です。ここで大切なことは、「知識・技能を得ること」ではなく「問題解決へのアプローチ方法を身につけること」です。このことが、これからの社会で活躍する子どもたちに、年齢・国籍等のちがう多様な人とのコミュニケーション・協力を通じて、様々な課題を乗り越える力、答えのない課題に向き合い新たな価値を創造することができる力をつけていくことにつながると考えます。